View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

創価大学教育学論集　第71号：戸田・濱川・岸・榊原・舘・高橋・飯塚　pp. 171 ～ 182

保育経験年数が乳幼児への言葉かけと語彙選定に関する伝達・非伝達経験の重要性と割合についての認識に与える影響

―現職保育者と保育者志望学生の比較を通して―

戸田　大樹　　濱川　喜亘　　岸　正寿
榊原　久子　　舘　秀典　　高橋　健司
飯塚　汐里

1 問題と目的

近年、幼児教育・保育界では新採保育者による早期離職の問題が深刻化している。この保育者の離職要因には処遇など様々な要因が複合的に絡んでいるが、乳幼児への言葉かけの力量不足に関する悩みも含まれている。保育教諭養成課程研究会(2016)は、新採保育者と保育者志望学生（以下、学生とする）が在学中に学んでおくべきであった内容として、言葉かけの技法に特に注目して報告している。この結果から、保育者養成校（以下、養成校とする）は学生の乳幼児に対する言葉かけの技法を高め、新採保育者の早期離職を減少させる責務がある。しかし、小川（2006）によれば、養成校の保育の知が実習生を通して、その知がどのように習得され、保育の実践に生かされているのかという保育の知の有効性を確かめる機会、連携、蓄積が欠如していることを指摘している。よって、養成校が学生の言葉かけの力量不足に関する問題を解決に導くためには、保育経験が浅い学生の言葉かけの能力向上に関して「どのような」経験を「どれだけ」積ませるか、という「経験内容」の精選と「量」の保障に関する視点が重要である。本研究では､学生の言葉かけの能力向上に関して重要な経験内容は、乳幼児に対して自身の言葉かけが｢伝達｣･｢非伝達｣する経験とする。戸田（2018）は、保育者の乳幼児への援助である言葉かけに伴う感情に着目し、保育経験年数が保育者の乳幼児への言葉かけに関する「自信」「不安」に影響を及ぼすことを報告している。このことから、学生は乳幼児への言葉かけが「伝達」する経験から自信を得ることに加え、「非伝達」する経験から不安や困難を抱く繰り返しの中でより確かな自信を得ると考えられる。ここでの「伝達」とは、「保育者の乳幼児に伝えたい事柄が、言葉かけと語彙によって適切に伝わる」ことを指し、「非伝達」は「保育者の乳幼児に伝えたい事柄が、言葉かけと語彙によって適切に伝わらない」ことを指す。

保育経験が少ない学生の場合、保育実践において間接的援助よりも言葉かけによる

直接的援助の比重が大きくなる傾向にある。しかし、学生は言葉かけレパートリーも十分に獲得していないことから、乳幼児に対して伝達可能な語彙選定に困難が伴う（戸田，2015）。後藤（2015，p.104）によれば、言葉かけとは「保育者が幼児に対してことばを通して行う援助のあり方の一つ」であり、その効果として「保育者が幼児に言葉をかけることによって、共感や励ましを受け信頼関係が結ばれる、アイデアや知識の提供を受ける、漠然とした思いが明確になる、イメージが豊かにふくらむ、ほかとの関係が広がる等の教育的な作用を及ぼす」ことが挙げられている。ただし、「幼児は保育者のことばから多くのことを敏感に察知するので、指示・命令のことばは少なくし不用意なことばも慎みたい」との注意点も示されている。また、語彙選定とは、保育者が「幼児の身近にある」「教育上指導しておきたい」という両者の視点を重ね合わせ、語の単位で指導する言葉を選定することを指す（福沢･池田，2004）。よって、学生の力量不足による困難さを補うために、養成校には、実践知の向上に大きく関与している乳幼児への言葉かけに加え、語彙選定に関する指導内容も改善する必要性がある。ここでの実践知とは「学問的理論や知識の単なる適用ではない，個別具体的な状況で発揮され更新される実践者独自の暗黙の知識や思考様式，方略の総体」（砂上・秋田・増田・箕輪・中坪・安見，2012，p.252）と定義されている。

このことに関連して、文部科学省は、近年における保育者の質の低下を鑑み、質の高い幼稚園教諭養成に向けて「幼児と健康・幼児と人間関係・幼児と環境・幼児と言葉・幼児と表現」を新規科目として設けた。これは、保育内容 5 領域の理論部分に該当する。一方で、従来の保育内容「健康」から保育内容「表現」までの科目は、指導法に関する演習の科目として位置づけられた。学生は、新設された保育内容 5 領域の理論を学んだ上で、従来の科目を通して、保育実践中に見られる保育者の援助の意図が達成されている乳幼児の望ましい姿や、その逆のより配慮が必要な姿に対する適切な指導法を獲得することが期待されている。この動向を踏まえ、保育内容の指導法に関して、幼児教育・保育に関連する保育内容「健康」の指導法（高橋・戸田，2017ab）や保育内容「人間関係」の指導法（岸・戸田・荒木，2017；岸・戸田・荒木，2018）、保育内容「言葉」の指導法（山本，2018）などの研究が開始されており、本研究は、保育内容「言葉」の指導法に位置づけられる。

保育内容の「言葉」の指導法に関する先行研究は、山本（2018）をはじめいくつか見られる。しかし、保育者や学生を対象とし、乳幼児への言葉かけと語彙選定が「伝達」･「非伝達」する経験内容に関する研究はない。この点について、諏訪（2000）「保育の質」が保育者の専門性に関する概念図の中軸に「保育者の意識」を立てているように、保育者の成長プロセスに伴う「感情」に着目することが重要である。新採保育者や学生は、乳幼児が登園してから降園するまでに示す喜怒哀楽など様々な感情の姿に対して適切な言葉かけと語彙選定を試みる。そして、新採保育者や学生は、自身の言葉かけや選定した語彙が乳幼児に対して「伝達」･「非伝達」する経験を積み重ねる

過程において、自信や不安などの楽観的または悲観的な感情を抱いていると考えられる。特に、経験の浅い新採保育者や学生は、乳幼児への言葉かけ以前に、語彙選定にも困難を示す傾向にある。なぜなら、新採保育者が経験してきた実践の大半は、学生時代のボランティアやインターンシップ、保育実習や幼稚園実習であり、保育経験年数が限りなく短いのが現状だからである。この短い保育経験年数では、学生の乳幼児への言葉かけと語彙選定に関する「伝達」･「非伝達」する経験が、十分に保障されているとは言えない。したがって、養成校は学生が経験するべき適切な「伝達」･「非伝達」経験の「量」を検討する必要性がある。

経験の量を検討する上で、区切りとなる保育経験年数は 5 年であると考えられる。その論拠として、保育教諭養成課程研究会（2016）は悩みを抱えつつ幼稚園教員としての力量が育つには 3 年から 5 年かかると報告している。さらに、戸田（2018）によれば、保育経験 5 年以上保育者は、保育経験 5 年未満保育者に比べ、乳幼児への言葉かけに関する「自信」が高いことを明らかにし、保育者の成長に必要な経験年数は 5 年であることを示唆している。

また、「伝達」経験と「非伝達」経験のバランスも重要である。現職保育者は自身の乳幼児への言葉かけと語彙選定に自信や手応えを感じつつも、同時に悩みや不安、困難を抱くだろう。一方で、保育経験が浅い学生は、現職保育者よりも強い悩みや不安、困難を抱くと推測される。保育者は日々の保育実践の最中、保育者の援助の意図が達成されている乳幼児の望ましい姿や、その逆のより配慮が必要な姿など複数の姿に対して、工夫しながら適切な言葉かけや語彙選定を行う。これを可能とする要因は、「成功」と「失敗」に裏付けられた豊富な保育経験である。特に重要なのは、自身の乳幼児に対する言葉かけや語彙選定における悩みや不安、困難という「非伝達」経験を粘り強く積み重ね続けた経験であり、このプロセスはまさに保育者の熟達化である。また、保育者は単に保育経験を積み重ねていることに終始しているのではなく、経験に裏付けられた鋭い省察力を駆使して、自身の言葉かけや語彙選定が乳幼児に「伝達」･「非伝達」した要因を両側面から分析し、翌日の保育実践に向けて改善を図る中で自身の成長を促す。つまり、保育者を目指す学生は自身の言葉かけや語彙選定が乳幼児に「伝達」する経験ばかりではなく、「非伝達」する経験をバランスよく積むことがその成長に重要であると考えられる。

しかし、現職保育者を対象とし、言葉かけや語彙選定の能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合に関する実証的な知見はない。先にも述べたように、わずか 1 ヶ月程度の実習では、学生の言葉かけや語彙選定が乳幼児に対して「伝達」･「非伝達」する経験が十分に保障されている根拠にはならない。むしろ、保育経験が浅い学生は、自身の言葉かけや語彙選定が乳幼児に対して「伝達」できていると高く評価してしまい、「非伝達」である状態に気付けず、「非伝達」経験の重要性を感じることが困難であると考えられる。その論拠として、西山（2005）は短期大学の 1・

2 年生は新任保育士よりも保育者効力感が高いことを示しており、加藤・浜崎・寺園・森野（2008）はその理由について、短大生は現実の保育経験が少ないため、その保育者効力感は自らの保育能力とは関係ない、主観的な保育者効力感である可能性を示唆している。また、中村（2006）は、養成校に通う学生の保育者効力感は保育者への憧れを基盤として形成されたものであり、「夢見る保育者効力感」であると指摘している。この点に対し、加藤他（2008）は、憧れを基として形成された保育者効力感の場合は、自らの見込みが現実に即していないことから、実際に保育を行うことで、見込みとは異なり失敗経験を重ねる可能性が高いため、保育者効力感を大きく低下させる要因となりうると述べている。したがって、養成校は乳幼児に対する言葉かけと語彙選定の「伝達」・「非伝達」経験に着目し、学生の主観的で現実に即していない「夢見る保育者効力感」から、現職保育者同様に客観的で現実に即した「確かな保育者効力感」に導く必要がある。ここでの保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことが出来るであろう保育的行為を取ることが出来る信念」(三木・桜井，1998，p.203）を指す。この保育者効力感はBndura（1977）が提唱した自己効力感を発展させたものであり、また、Gibson & Dembo（1984）が教師効力感について保育者を対象として提唱した概念である。

以上を踏まえ、本研究では、養成校における学生の乳幼児への言葉かけと語彙選定に関する指導内容の改善に向け、保育経験年数が保育者及び保育者志望学生の「伝達」・「非伝達」経験に関する重要性の認識に与える影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、①「伝達」・「非伝達」経験を積むことの重要性と、②能力向上に最も寄与すると考える「伝達」・「非伝達」経験の割合についての認識を明らかにする。

2 調査

1．目的

保育経験年数が、一斉保育場面での乳幼児への言葉かけ及び語彙選定の「伝達」・「非伝達」経験に関して、それぞれを重要視する程度や、割合の認識に及ぼす影響を明らかにすることが本調査の目的である。

2．方法

(1) 実験計画

①重要視得点に及ぼす保育経験年数の影響について

保育経験年数の 1 要因について「5 年以上保育者」と「5 年未満保育者」、「実習経験済学生」、「実習未経験学生」の 4 水準の差を調べる、1 要因 4 水準の被験者間計画である。

②能力向上に最も寄与すると考える「伝達」・「非伝達」経験の重要度の割合について

最も能力向上に寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合について、上述の 4 水準の差を調べる計画である。

（２）調査時期

2018 年 9 月～ 11 月。

（３）調査対象

調査対象者は、5 年以上保育者 58 名（男性 1 名、女性 57 名）、5 年未満保育者 25 名（男性 1 名、女性 24 名）、実習経験済学生 35 名（男性 16 名、女性 19 名）、実習未経験学生 60 名（男性 3 名、女性 57 名）であった。

（４）調査内容

①質問内容

質問内容は、以下の通りである。なお、5 年以上保育者と 5 年未満保育者に対しては、実際に担当した年齢の乳幼児に対してのみ回答するように求めた。また、実習経験済学生に対しては、実習先で実際に担当した年齢の乳幼児に対してのみ回答するように求めた。

1）重要視得点に及ぼす保育経験年数の影響についての質問

「あなたは実際に保育者になって、学生時代に行った一斉保育（幼稚園や保育所での部分実習や責任実習）の時のご自身の「言葉かけ / 語彙選定」が乳幼児に「伝わる経験 / 伝わらない経験」を積むことは､新採保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ / 語彙選定の能力向上」に重要だと思いますか」

「言葉かけ / 語彙選定」と「伝わる経験 / 伝わらない経験」に関する 4 つの質問に対する回答は､「5 ：とても重要だと思う、4 ：やや重要だと思う、3 ：どちらでもない、2 ：あまり重要だと思わない、1 ：まったく重要だと思わない」の 5 段階評定尺度とし、自由記述で回答の理由を求めた。

2）能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合についての質問

「あなたは実際に保育者になって、学生時代に行った一斉保育（幼稚園や保育所での部分実習や責任実習）の時のご自身の「言葉かけ / 語彙選定」における「伝わる経験 / 伝わらない経験」は、新採保育者になってからの乳幼児への「言葉かけ / 語彙選定の能力向上」においてどのくらいの割合が重要だと思いますか」

「言葉かけ / 語彙選定」に関する 2 つの質問の回答は､「伝わる 10 割：伝わらない 0 割」～「伝わる 0 割：伝わらない 10 割」の中から一つ選択するよう求めた。

②倫理的配慮

本調査は、創価大学・人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者には、研究の意義、目的、研究への参加は任意であること、匿名性の保持の方法について文書で説明し、同意書の提出をもって調査協力への同意とした。

（５）手続き

現職保育者については、幼稚園や保育所の保育者及び保育者養成校の教員に調査を依頼するとともに、質問紙の配布・回収を行った。保育者志望学生については、筆頭著者が依頼し、質問紙を配布・回収した。質問紙は計200名に配布し、178名分を回収した（回収率89%）。

３ 結果

（１）重要視得点に及ぼす保育経験年数の影響について

「言葉かけ・語彙選定」それぞれに対する重要視得点について、4 水準の平均値と標準偏差を算出した（表 1 参照）。

その結果、表 1 の通り、保育経験年数が乳幼児への言葉かけと語彙選定に与える影響に関係する重要視得点は、「言葉かけ・語彙選定」「伝達・非伝達」の全ての質問で、4 水準全てにおいて、概ね 4 を上回っていた。つまり、どの水準においても全ての経験が重要視されていると言える。よって、経験年数によらず自身の言葉かけや語彙選定が乳幼児に伝わる経験も伝わらない経験もともに積むことが、新任保育者になってからの言葉かけと語彙選定の能力が向上する上で重要であると見なされていると言える。

表 1　保育経験年数が乳幼児への言葉かけと語彙選定に与える影響に関係する重要視得点の平均値と標準偏差

		n	*M*	*SD*
言葉かけ「伝達」	5年以上保育者	58	4.34	0.11
	5年未満保育者	25	4.36	0.16
	実習経験済学生	35	4.51	0.13
	実習未経験学生	60	4.72	0.08
	合計	178	4.51	0.06
言葉かけ「非伝達」	5年以上保育者	58	4.36	0.10
	5年未満保育者	25	4.12	0.19
	実習経験済学生	35	4.11	0.17
	実習未経験学生	60	4.58	0.08
	合計	178	4.35	0.06
語彙選定「伝達」	5年以上保育者	56	4.00	0.11
	5年未満保育者	25	4.16	0.18
	実習経験済学生	34	3.94	0.15
	実習未経験学生	59	4.54	0.08
	合計	174	4.20	0.06
語彙選定「非伝達」	5年以上保育者	57	4.02	0.10
	5年未満保育者	25	4.04	0.19
	実習経験済学生	34	3.94	0.16
	実習未経験学生	58	4.36	0.11
	合計	174	4.12	0.06

（２）能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合について

言葉かけと語彙選定の能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合についての認識が、水準間でどのように異なるのかを明らかにするために、調査対象者から得られた回答に対して χ^2 検定を行った。なお、ここでは 5 年以上保育者と 5 年未満保育者を「保育者」としてまとめている。

①「言葉かけ」能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合

表 2 で示すように、有意傾向が見られた（χ^2（4）=9.29, p<.10）。残差分析の結果（表 3 参照）、保育者の言葉かけの能力向上において、「伝わる 6 割：伝わらない 4 割」の割合が有意に少なく（p<.01）、「伝わる 5 割：伝わらない 5 割」の割合が多い傾向（p<.10）が見られた。また、実習未経験学生の言葉かけの能力向上において、「伝わる 6 割：伝わらない 4 割」の割合が有意に多く（p<.05）、「伝わる 4 割：伝わらない 6 割」の割合が有意に少ない傾向（p<.10）が見られた。実習未経験学生については、「言葉かけ」能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合に有意差は見られなかった。したがって、保育経験が多いほど乳幼児への言葉かけ「非伝達」経験を重要視する一方で、少ないほど、「伝達」経験を重要視する傾向にあると言える。

②「語彙選定」能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合

表 4 で示すように、有意傾向が見られた（χ^2（4）=9.27, p<.10）。残差分析の結果（表 5 参照）、保育者の語彙選定の能力向上において、「伝わる 6 割：伝わらない 4 割」の割合が有意に少なく（p<.05）、「伝わる 5 割：伝わらない 5 割」の割合が多い傾向（p<.10）が見られた。また、実習未経験学生の語彙選定の能力向上において、「伝わる 6 割：伝わらない 4 割」の割合が有意に多い（p<.01）ことが明らかになった。実習経験済学生においては、「言葉かけ」能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合に有意差は見られなかった。したがって、保育経験が多いほど乳幼児への語彙選定「非伝達」経験を重要視する一方で、少ないほど、「伝達」経験を重要視する傾向にあると言える。

表 2　乳幼児への言葉かけ能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合（N = 174）

	経験の割合			合計
	伝わる6割以上・伝わらない4割以下	伝わると伝わらない5割ずつ	伝わる4割以下・伝わらない6割以上	
保育者	25(31.3%)	33(41.3%)	22(27.5%)	80
実習経験済学生	16(45.7%)	10(28.6%)	9(25.7%)	59
実習未経験学生	33(55.9%)	17(28.8%)	9(15.3%)	35
合計	74(100%)	60(100%)	40(100%)	174

表 3　乳幼児への言葉かけ能力向上に最も寄与すると考える「伝達」・「非伝達」経験の割合に関する残差分析の結果（N = 174）

	経験の割合			
	伝わる6割以上・伝わらない4割以下	伝わると伝わらない5割ずつ	伝わる4割以下・伝わらない6割以上	合計
保育者	25(31.3%)	33(41.3%)	22(27.5%)	80
	-2.78**	1.73＋	1.31	
実習経験済学生	16(45.7%)	10(28.6%)	9(25.7%)	59
	0.43	-0.82	0.43	
実習未経験学生	33(55.9%)	17(28.8%)	9(15.3%)	35
	2.56*	-1.13	-1.74＋	
合計	74(100%)	60(100%)	40(100%)	174

**p<.01，*p<.05，＋p<.10

表 4　乳幼児への語彙選定能力向上に最も寄与すると考える「伝達」・「非伝達」経験の割合（N = 167）

	経験の割合			
	伝わる6割以上・伝わらない4割以下	伝わると伝わらない5割ずつ	伝わる4割以下・伝わらない6割以上	合計
保育者	22(28.6%)	38(49.4%)	17(22.1%)	77
実習経験済学生	12(36.4%)	12(36.4%)	9(27.3%)	33
実習未経験学生	30(52.6%)	19(33.3%)	8(14.0%)	57
合計	64(100%)	69(100%)	34(100%)	167

表 5　乳幼児への語彙選定能力向上に最も寄与すると考える「伝達」・「非伝達」経験の割合に関する残差分析の結果（N = 167）

	経験の割合			
	伝わる6割以上・伝わらない4割以下	伝わると伝わらない5割ずつ	伝わる4割以下・伝わらない6割以上	合計
保育者	22(28.6%)	38(49.4%)	17(22.1%)	77
	-2.40*	1.95＋	0.51	
実習経験済学生	12(36.4%)	12(36.4%)	9(27.3%)	33
	-0.26	0.65	1.10	
実習未経験学生	30(52.6%)	19(33.3%)	8(14.0%)	57
	2.74**	-1.51	-1.46＋	
合計	64(100%)	69(100%)	34(100%)	167

**p<.01，*p<.05，＋p<.10

4 考察

まず、重要視得点に及ぼす保育経験年数の影響について分析した結果、保育経験の年数によらず、自身の言葉かけや語彙選定が乳幼児に伝わる経験も伝わらない経験もともに、自身の言葉かけと語彙選定の能力が向上する上で重要であると見なされていることが明らかとなった。

保育者志望学生も現職保育者と同様に重要視しているという結果は、加藤他（2008）が指摘しているように、保育経験の浅い学生の保育者効力感は自らの保育能力とは関係なく、主観的な保育者効力感である可能性を示唆している。一方で、現職保育者は保育経験を重ねる中で、乳幼児への言葉かけと語彙選定において成功と失敗を繰り返

しながら自らの実践を省察する。つまり、現職保育者の重要視得点は、自身の言葉かけと語彙選定の伝達の成否を、高い基準で客観的に自己評価していることを反映していると考えられる。したがって、養成校は学生に「伝達」･「非伝達」経験の場を提供する上で、「非伝達」経験について現職保育者と同様に省察し、客観的に自己評価できるように努めることが重要であると言える。

次に、能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合について分析した結果､言葉かけと語彙選定ともに､保育経験が多いほど乳幼児への言葉かけ「非伝達」経験を重要視する一方で、少ないほど、「伝達」経験を重要視する傾向にあることが明らかとなった。

この結果は、実習未経験の学生は、自身の実践知の試行経験が少ないことから、将来の実習における失敗を想定し、事前に成功経験を多く積むことで実践知を深めたいと考えていることを示しているのでないだろうか。実習経験済みの学生については、言葉かけと語彙選定の双方で、保育者や実習未経験の学生のような傾向性が認められなかった。このことから、非伝達経験の重要性について、現職保育者ほどには理解できていないものの、実習未経験の学生よりは理解できていると言える。実習経験済みの学生は 1 、 2 ヶ月程度の保育実習の経験を通して、理論と実践を融合することへの自信や不安という両側面の感情を抱くため､「非伝達」経験について実践的に理解し始めた段階にあると言えるだろう。

以上を踏まえると、養成校は学生の言葉かけと語彙選定の能力向上を意図し、乳幼児への「非伝達」経験についての省察と自己評価の機会を確保するとともに、「伝達」経験よりも「非伝達」経験をより多く保障することが重要であると言える。

5 まとめと今後の課題

本研究は、養成校における学生の乳幼児への言葉かけと語彙選定に関する指導内容の改善に向け、保育経験年数が保育者及び保育者志望学生の「伝達」･「非伝達」経験に関する重要性の認識に与える影響を明らかにすることを目的とした。具体的には、質問紙調査によって、「伝達」･「非伝達」経験を積むことの重要性と、能力向上に最も寄与すると考える「伝達」･「非伝達」経験の割合について、保育経験年数の 1 要因について「 5 年以上保育者」と「 5 年未満保育者｣､「実習経験済学生｣､「実習未経験学生」の 4 水準の差を調べる、 1 要因 4 水準の被験者間計画で調査した。

その結果、養成校が学生の言葉かけと語彙選定の能力向上について、言葉かけと語彙選定ともに､「伝達」経験よりも「非伝達」経験をより多く保障することの重要性が明らかとなった｡「非伝達」経験を増すことで、乳幼児に対する言葉かけと語彙選定の成否に対する省察と自己評価の客観性が増し、主観的で現実に即していない「夢見る保育者効力感」から、現職保育者同様に客観的で現実に即した「確かな保育者効

力感」につながると考えられる。ひいては、学生の理想と現時のギャップ感の溝を埋め、親採保育者の早期離職者数の減少につながるだろう。従来、養成校は保育経験の少ない学生に対する言葉かけなどの指導は、演習を通した実践よりも理論面に偏っていた。本研究の成果は、養成校における学生の言葉かけと語彙選定の能力向上に関し、「非伝達」経験の「量」的保障の必要性という新しい知見をもたらしたと言える。この点で、本研究の結果には社会的意義があると言えよう。しかしながら、本研究では、能力向上に最も寄与すると考える「伝達」・「非伝達」経験の割合について、どのような考えのもとで重要性が認識されているのか、理由を明らかにしていない。現職保育者と学生のそれぞれで、経験の違いなどから理由は少なからず異なるはずである。両者の差を分析することで、学生に対する「非伝達」経験の保障の在り方について、具体的にデザインすることができるようになると考えられる。

今後の課題は、自由記述やインタビュー調査などでこの点を明らかにすることである。それによって、現職保育者のように、客観的で現実に即した認識へと学生を導くための方法論を養成校に提供することが可能となるだろう。

引用・参考文献

小川博久 (2006)「保育学の学問的性格をめぐって－学会活動のあり方を考える手がかりとして－」『聖徳大学紀要』,17,63-70.

加藤孝士・浜崎隆司・寺園さおり・森野美央 (2008)「保育専攻短大学生の保育者効力感と実習評価との関係－実習前の保育者効力感の高低を要因として－」『応用教育心理学研究』,25(1),15-23.

Gibson, S., & Dembo, M. H(1984) Teacher efficacy: A construct validation. Journal of Educational Psychology, 76,569-582.

岸正寿・戸田大樹・荒木由紀子 (2017)「保育内容「人間関係」の指導法に関する一考察―幼児期の人間関係の形成に着目した事例の検討を通して―」『創価大学教育学論集』,69,109-127.

岸正寿・戸田大樹・荒木由紀子 (2018)「保育内容「人間関係」の指導法の意識に関する一考察 ―保育者の経験年数に着目した質問紙調査の結果から―」『創価大学教育学論集』,70,109-123.

諏訪きぬ (2000)「保育選択の時代と「保育の質」」金田利子・諏訪きぬ・土方弘子編『保育の質の探求「保育者－子ども関係」を機軸として』, ミネルバヴァ書房 ,21.

砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 (2012)「幼稚園の片付けにおける実践知－戸外と室内の片付け場面に対する語りの比較－」『発達心理学研究』,23(3),252-263.

高橋健司・戸田大樹 (2017)「保育・教育課程における領域「健康」の指導展開：触れ

合い体操を導入した保育に着目して」『創価大学教育学論集』, (68),251-258.
高橋健司・戸田大樹 (2017)「保育・教育課程における領域「健康」の指導展開―園外活動場面の保育に着目して―」『創価大学教育学論集』,(69),19-28.
戸田大樹 (2015)「保育科学生の実習における課題に関する研究－言葉かけの問題を中心として－」『茶屋四郎次郎記念学会誌』,5,125-134.
戸田大樹 (2018)「保育者の乳幼児に対する言葉かけ及び語彙の意識に関する研究」『第71 回日本保育学会研究発表大会』,1067.
中村多見 (2006)「 保育学生の保育観 (1) 保育者効力感の発達」『高松大学紀要』,45,197-206.
西山修 (2005)「幼児の人とかかわる力を育むための保育者効力感尺度の開発」『乳幼児教育学研究』,14,101-108.
Bandura, A.(1977) self-efficary: Toward a unifying theory of behavior change. Psychological Review, 84,191-215.
福沢周亮・池田進一『幼児のことばの指導』,2004, 教育出版 ,60.
保育教諭養成課程研究会 (2016)「幼稚園教員養成養成課程カリキュラムと現職研修とのギャップの検証」『平成 27 年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究』,34.
保育教諭養成課程研究会 (2016)「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅡ－養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用教員研修－」『平成 27 年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル事業』,17-18.
三木知子・桜井茂男 (1998)「保育専攻短大学生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』,46(2),203-211.
森上史郎・柏女霊峰 (編)『保育用語辞典』,2015, ミネルヴァ書房 ,104.
山本聡子 (2018)「保育内容指導法 言葉における学生の学び：実習での経験とのつながりに着目して」『柳城こども学研究』,1,51- 7 .

謝辞

本論文の作成に当たり、共著者の方々には、研究データの収集に多大なご協力をいただきまして心より感謝致します。また、幼稚園や保育所、認定こども園の先生方にも深く感謝いたします。

Effect of Child Care Experience in Years on Recognition of Importance and Percentage of Communication/Non-communication With Infants and Toddlers through Speaking to Them and Selection of Vocabularies

— Comparison of Current Child Care Providers with Students of Training Schools of Child Care Providers —

Daiki TODA　Yoshinobu HAMAKAWA　Masatoshi KISHI
Hisako SAKAKIBARA　Hidenori TACHI　Kenji TAKAHASHI
Shiori IIZUKA

The objective of this study was to clarify the effect of years of child care experience on recognition of the importance of communication/non-communication with infants and toddlers through speaking to them and selection of vocabularies in the setting of all in one group of child care.

Two points became clear as a result of a questionnaire. First, regardless of the experience of child care providers, they consider that speaking to infants and toddlers and selection of their vocabularies are very important in developing their skills since they started their career as child care providers, even if those words can or cannot be recognized by infants and toddlers. Secondly, the more experiences child care providers have, the more focus is placed on the experience of non-communication with infants and toddlers through both “speaking to” and “selection of vocabularies”. Whereas the less experience child care providers have, the more focus is placed on the experience of communication.

Based on these results, schools providing training to child care providers should focus more on teaching students to objectively evaluate themselves when the schools provide opportunities for their students to experience communication/non-communication, emphasizing more on observation of non-communication similar to that of experienced child care providers.